

コロナ禍における日中活動の在り方

ステップ広場ガル 主任 石橋 裕也

はじめに

今回の報告では、コロナ禍での日中活動にスポットをあて、集団での活動にどのような影響があったのかまとめていく。

また、2022年3月～4月に入所施設内で発生した「新型コロナウイルス感染拡大（クラスター）」の様子や生活に与えた影響なども振り返りながら、現在の活動の様子や課題についても報告する。

ガルの生活棟・日中活動班について

- ステップ広場ガル（入所：50名定員、50名利用）は…

☆生活棟

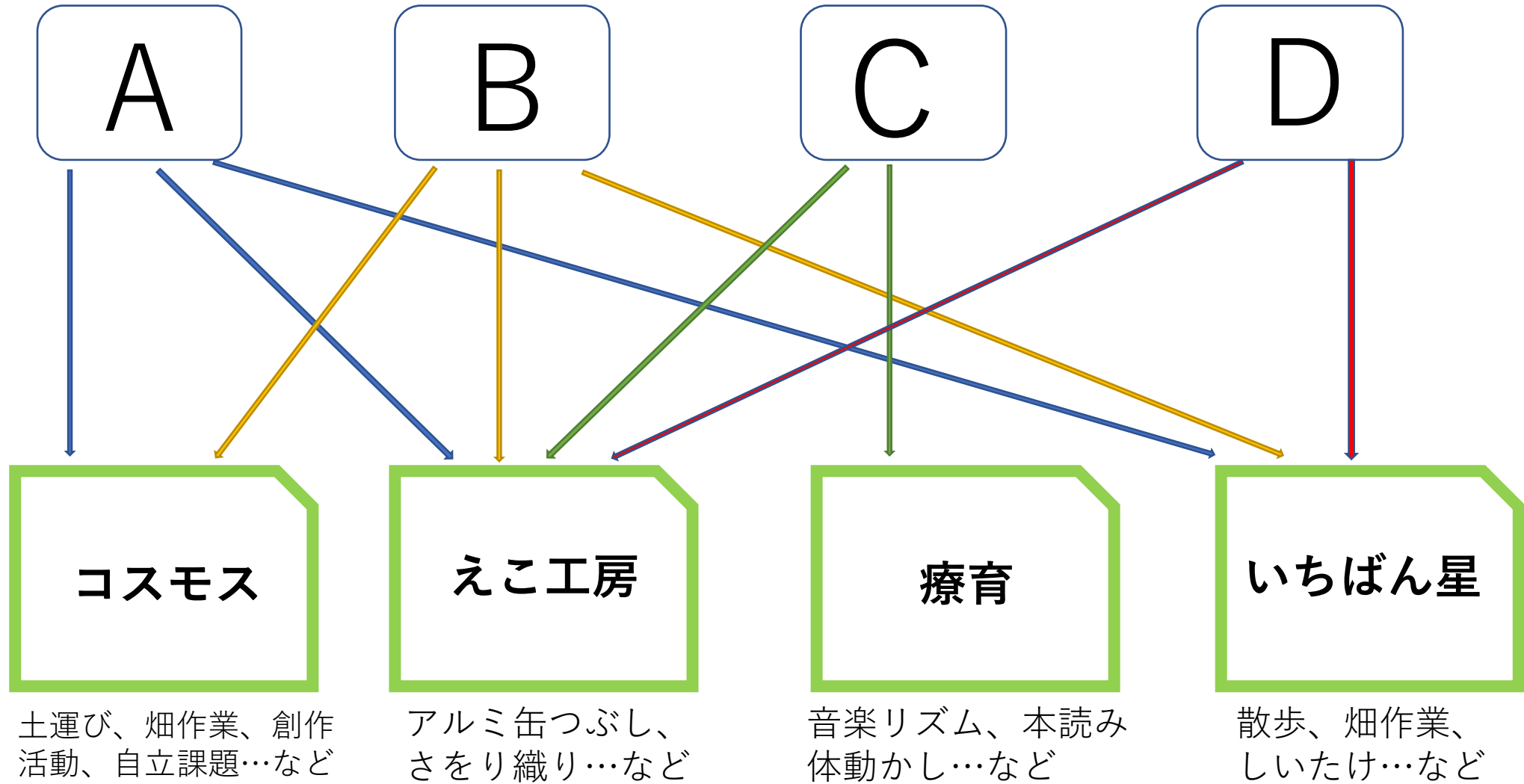
【A・B・C・D】の4棟に、それぞれに10数名が生活をしている。
男女混合棟で、棟により男女比は異なる。

☆日中活動班

【コスモス班】 ・ 【えこ工房班】 ・ 【療育班】
【いちばん星 牧（ガル班）】の4班に分かれ活動している。

☆開所当初から生活の場と活動する場を別にし、支援者も「生活」
「日中活動」の専任として配置していた。（職住分離）

・ 生活棟と日中活動の関係



生活の様子



コスモス班忘年会



コスモス班 苗植え



クリスマス会



エコ工房班 さをり織り



療育班お食事会



療育班 造形



エコ工房班 忘年会



節分 豆まき

コロナ禍へ

これまでの生活で、当たり前のように行っていた、個別の外出や集団での旅行・年中行事…。そんな当たり前が、コロナ禍により、行いにくくなり、様々な場面で行動制限をお願いすることとなった。それは先述の行事等だけではなく、一時帰宅や面会などへも影響し、利用者のみならず、ご家族にも心配や不安が多くなったと感じられる。

一方で、行動を制限するだけでは、感染拡大を防げないため、「感染を未然に防ぐための対策」と「感染者が出た場合の対応を学ぶための研修」を行った。感染対策には、マスクや手指消毒のみではなく、フェイスシールドやグローブを活用し、感染者が出た場合に備え、ゾーニングや防護服の着用などスムーズに行えるよう研修を行った。

研修の様子…



防護服、着脱の練習（2020年実施）

ステップ広場ガルでも新型コロナの感染…そして拡大へ…

2022年春、利用者の発熱⇒抗原検査で発覚した新型コロナウィルスの感染。

日中活動棟への移動を中止し、生活棟ごとの過ごしへと変更を行い、およそ1か月間、利用者さんには、さらに行動を制限させていただくこととなってしまった。（様子はのちほど…）

しかし、そのような生活の中でも「この環境の中でできることを利用者さんたちに提供したい」と活動棟で行っている活動を棟単位で提供することになった。また感染者のいる棟（レッドゾーン）では、症状が引いたことを確認してから、活動提供を開始した。

活動の一部を紹介

散歩

- 感染拡大防止の観点からも、比較的、提供しやすい活動。
- 天気が良ければ提供でき、身体的な活動による発散や健康維持増進にもつながる。何より「とじこもり」の状態になっていたので、精神的な発散もできる活動。これまで、特にコスモス班やいちばん星のメンバーが取り入れることの多かった活動だが、他の班所属の利用者も取り入れる機会が増えた。
- 感染対策として、通常であれば、利用者の下駄箱のある玄関から外へ出るが、収束するまでは各棟の裏口を利用するなどして接触が少なくなるよう配慮した。



自立課題（ワーク）

- ・通常、雨天等で外の活動が行えない場合に、活動棟での活動の一つとして実施している。
- ・これまで、コスモス班の利用者が主に行っている活動であったが、棟単位での活動になったことで、別の班の利用者も体験する機会が増え、新たな一面を見ることができた。

これまで、他者と同じ空間で活動することが苦手だったけど、この数年で、刺激調整もされて、みんなとワークを取り組めるようになりました。



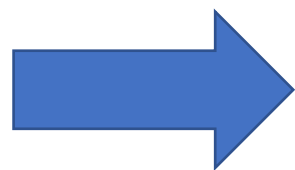
単調な作業や繰り返しばかりの活動だと乗り気になりにくかったけど、少し難しい課題に取り組み、集中しています。

さをり織り

えこ工房班で行っている「さをり織り」の卓上機を生活棟に移動させ、場所を変えて同じ活動が提供できるようにした。出来上がった織物はひと手間加えて、作品として仕上げるものもある。



毎日、少しずつ頑張っています！



事務所、受付にあるカレンダー。出来上がった織物を数作合わせて作りました。日にちの裏面は色を変え、毎朝、利用者さんとひっくり返し「今日」が分かるようにしています。

本読み

主に、療育班やいちばん星での活動で取り組んでいたものを各棟で実施。支援者も太鼓などの道具を用いて効果音を出したり、読み方変えてみたりしながら、工夫をしている。



活動体制の変更

利用者 活動を行う集団の変更

- 感染対策の一つとして、利用者同士が接する機会を極力減らすため、生活棟単位のメンバー構成で活動するようにした。また、巷の感染状況などに合わせて、活動場所への移動の可否を検討した。

A棟



いちばん星 & A棟内での活動

B棟



コスモス棟 & B棟内での活動

C棟



療育室 & C棟内での活動

D棟



えこ工房棟 & D棟内での活動

支援者 非常勤職員が様々な活動や棟を体験する

- 今年度より、利用者が棟単位での活動をしているため、これまで活動班ごとに担当を決めていた非常勤職員（パート）の動きを崩し、1か月ごとに担当する棟を変えた。（例：今月はA棟、来月はB棟…）

「様々な活動や様々なケースを通じて利用者を多角的に知ることに」
「同一部署を担当する『慣れ』に頼らず、常勤職員を含めたコミュニケーションを積極的に図り、利用者理解を深めること」を主な目的とした。

実施から半年経過して…、これまで接していなかった利用者に接する機会をもてるようになり、新たな発見があったなどの意見も多く聞かれる一方で、1か月という短いスパンで変更するため、覚えたことや知ったこと・疑問に思ったことなどを共有したり、次につなげる前に、担当する棟が変わっていくことへの不安・不満の声も聞かれている。
（後期に向けて、変更のスパンなど検討中）

コロナ禍における活動に対しての所感とまとめ

コロナ禍3年目に入り、事業所内でのクラスターも経験する中で、これまでと同様の活動の在り方では、感染拡大のリスクは避けられないため、様々な対策・工夫を講じてきた。しかし、実際は、テレビ等で見かける感染状況に比例するように、近隣での感染状況を耳にする機会も増え、事業所内でも関係機関や短期入所利用者の感染の話が耳にすることが多くなった。

今年8月にもステップ広場ガル（入所）内での感染が確認され、職員体制においては法人内事業所での協力を得たり、短期入所の利用制限を行うなど、そのたびに多くの利用者・職員の負担が大きくなることを実感する。

そのような中での日中活動の提供ではあるが、これまでに積み上げてきたものに加えて、利用者の力が発揮できること、やりがいをもてることを検討・実施したい。

今回の報告では、特にコロナ禍における日中活動にスポットをあてたため、個別の活動の様子や取り組みについて報告できなかったが、「活動場所やメンバーを区切ることで、結果的に刺激調整が行われ、落ち着いた活動時間が送れる方」がいたり、反対に「変わらぬメンバーの中で過ごすことによる、切り替えにくさによる混乱を招いた方」などもあった。そのことについては、また別の機会で報告できればと考えている。また、支援者側の動きなども、まだまだ試行錯誤の中にあるため、これも別の機会に報告したい。

これからも様々な環境や状況の変化があるだろうが、支援者の中で課題の共有と支援の提供・振り返りを行いながら、利用者主体の活動を提供していけるように努めていきたい。

余談ですが…クラスター発生時の風景



←正面玄関にガウンやフェイスシールドなど準備し、いつでも対応できるようにしていました。当時は、3か所の玄関からの出入りは行わず、各棟の裏口から出入りをしていました。

会議室はガウン・フェイスシールドなどの防護服や消毒などの備品庫として活用していました。⇒





←利用者の感染発覚当初より、短期入所棟を感染者の生活の場とし、テープでレッドゾーン（感染者のいる場所）・イエローゾーン（防護服の着脱を行う場所）・グリーンゾーン（汚染されていない場所）と区切って対応をしていました。

レッドゾーンとなった棟の裏口付近に防護服の着脱等が行えるスペース（イエローゾーン）を作り、レッドゾーンへ入る職員は、直接ここから出勤していました。⇒





⇐通常であれば、食事の載ったカートを食堂まで取りに行っていたましたが、当時は、感染者が棟にいる・いないに関わらず、厨房職員や、グリーンゾーンの職員が棟の入り口まで運んでいました。食器は、使い捨てのお弁当箱や食器を使っていました。

ご清聴ありがとうございました